

# 作品「花手前」について

花芸安達流二代主宰 安達 瞳子

Hanatemae

ADACHI Toko

## Abstract

Floral movement involves a return to the starting point of the physical act of KAGEI, in order to realize new creative ideas. Through the effort of the florist and the musicians, spectators are able to become as one with each branch and each leaf as they are added to create a completed piece. The spectators can enjoy being present as beauty comes into being.

私は、花芸安達流二代主宰安達瞳子と申します。安達の花の始祖・潮花は広島浄念寺に生まれ、東京で独自の作風を創流した人でした。潮花の娘である母が「花芸安達流」をおこし、私は潮花が生れた浄念寺17世住職の長女に生まれ、子供のない母の後継者となるため、幼い時より養女として東京で育ちました。東京での部屋は竹林の中の二階にあり、朝に夕に雨の日も風の日も竹の声を聞いて育ちました。そして気付いた時、竹がとても身近な植物になっていました。

私は、竹から真っ直ぐ空に向かって伸びる力強さと、ゆらゆらと風に揺らされても決して折れる事のないしなやかさに、真の強さを教わったような気がします。

「私は椿に育てられ、竹に支えられながら、桜を課題とした一人の花道家として、花の道を歩いて参りました。」

これは母の言葉です。私も竹に包まれて暮らす内に「竹に支えられながら」という言葉に込められた母の気持ちが、少しわかるようになりました。

そして華やかな花よりも、花を引き立てる葉。竹に象徴される緑が好きになっていました。竹のそばで育ってきたからこそ、緑に惹かれるのかも知れません。花は咲いている時期に限りがありますが、葉に目を向ける事によって花の咲いている時期にはない魅力を見つける事ができます。又、いつも側にあるのは緑だということに気付かされます。

私共、花芸安達流では「花手前」という、作品を生けていく過程を、生け手と音楽と花とお客様の四者が一体となって“美の熟していく時間を共有する”という安達流独自のパフォーマンスがあります。昔、名手が花を生ける過程を公家や武士が最も贅沢な花の楽しみ方として鑑賞した習慣にヒントを得た母の造語です。

母が「花手前」をする姿は幾度も見てきましたが、私が舞台上上がったのは伊豆の「あさば」が初めて。平成九年の春でした。17歳の頃だったと思います。その頃を思い返すと、幾十本もの青竹の仕込み。水洗いをしたり、金ブラシで磨きあげたり、花材が入荷すると蕾に一喜一憂しながら、区分・水揚・荒枝どり・管理。繰り返されるリハーサルの後やっと迎える本番です。本番



では、母と目で合図、確認をしたり、一手一手を大切に生けていきます。その時初めて母と一体になったと実感した事を懐かしく思い出します。

初舞台となった思い出深い  
花手前

「花手前」で使用する器は、場所によって規模によって変わり、決まりもありますが、上記で書いた様に私は極力竹を器として使用したいという思いがあります。竹1本ではすっきりとした器に。何十本と組み合わせれば大作にと無限に変化させることができます。竹に支えられて…と私も思いながら、母の花手前を継承しています。



副主宰就任祝賀会—継承の儀“緑仙抄”—

初代安達瞳子が日本  
椿協会の会長を務めて  
いる折、同協会役員で当  
時貴大学教授箱田直紀  
先生から日本の伝統文  
化の一つでもある“いけ  
花”を授業に取り入れた  
いとお話をいただき、  
恵泉女学園大学「園芸芸  
術論a」(現:日本の園芸



芸術) がスタートいたしました。その後、二代に代が変わっても変わらず続けさせていただいておりますこと、この場をお借りして感謝、御礼申し上げます。また、授業以外にも2008年からスプリングフェスティバルで安達の花のデモンストレーションをさせていただいております。ここでは教室風に花手前をさせていただき、少しでも初夏の爽やかさや、植物を生ける事が身近に感じられるようなプログラムで実施しています。



スプリングフェスティバルにて

私共日本人は、カエデの若葉をガラス鉢に一杯盛っても、黄葉紅葉を籠に一枝挿しても“花を生けた”と言います。春夏秋冬の変化と多様な植物に恵まれた国土で古人が自然に対して最初に抱いた思いは、自然を畏れ敬うという宗教的な感情でした。そして農耕民族として自然に寄り添って歩むうちに、草木も人間も同じ生命、生物だと気づき、共感的な自然感情を抱くようになりました。だから、数百年もの間、生命の本質を求めて、飽きることなく花を生け続けて、生活芸術としての芸道までに発展させてきたのでしょう。

そう思い巡らすと、生命にはリズムがあります。春に凍土を割って息吹く草の芽も、夏に太陽の光を透かす青葉若葉も、秋に黄に赤に色づく紅葉や木の実・草の実も、冬に木枯に鳴る落葉樹や深緑の常緑樹も、その植物その季節ならではの力を発揮して輝いた時こそが「花」なのだという考えに到達したに違いありません。世界に類のない日本独自の美意識です。

従って花は、自然空間から生活空間に移動しただけでは、本当の意味で生けたことにはなりません。植物それぞれの個性と生ける人の個性が重なって、自然のまま以上に輝いて新しい生命として誕生した時、初めて作品になり、花が「花」になるのだと思います。また、その植物の持つ生態や形態によって印象も変わります。植物が素材として本来持っている生命としての方向性と、作品の表現として素材を高める造形上の方向性との両者を表現出来た時、「花の座」ができ、方向感情として一致すると美しいまとまりとなり、一瓶の作品を制作する上での要となります。それは大作でも、1輪の花でも同

じです。将来、そんな作品を生けられるようになりたい—と思いながら日々植物と向き合っています。そのような生活の中で毎年、春秋の数日間を貴大学で学生の皆様とご一緒するいけ花の授業は、私にとりましても新鮮で、刺激ともなる時間です。恵泉女学園大学は園芸科があるため、植物を肌で感じたり、興味のある学生が多く、授業をみてもとても熱心さが伝わってきます。学生の作品発表の場も設けられれば…と思ううちに一年があっという間に過ぎてしまいます。この大学で学ばれた方々が日本の文化を伝えられる人材に…そして、大きな世界でご活躍くださる事を願っております。